

# *The Buried Giant* におけるイシグロ文学の

## 継承と発展<sup>1</sup>

---

池園 宏

---

### 序

2015年、カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) は長編小説としては10年ぶりとなる新作 *The Buried Giant* (以下 *BG* と略記) を世に出した。英国で最も権威あるブッカー賞の受賞作 *The Remains of the Day* (1989) によって世界的に脚光を浴びて以来、イシグロの作家像や作品像には一定のイメージが付与されてきた感がある。しかし実際は、彼は新作を公表するたびに題材や設定等の面で新たなアプローチを示し、読み手の予想を覆すような物語世界の構築を試みてきた。*The Unconsoled* (1995) はその端的な例であろうが、この点は *BG* にも当てはまる。舞台は伝説のアーサー王亡き後の太古の時代で、妖精、食人鬼、あらゆる人間の記憶を奪う巨大な竜の怪物など架空の生き物が登場するファンタジー風の仕上がりとなっている。このかつてない作風の変貌ぶりによって、出版直後より様々な賛否両論が沸き起こったのは当然の成り行きである。その一因としては、好評を博し映画化までなされた前作 *Never Let Me Go* (2005) (以下 *NLMG* と略記) との差異が大きかった点も否定できないだろう。そしてそのような差異あるいは作品の出来に関する議論にも一定の意義は認められるだろう。

しかしながら、本論考ではむしろそれまでの作品、とりわけ直近に書かれた *NLMG* との関連性やそこからの継承性に焦点を当てた上で、この新作に見出せるイシグロ文学の発展的要素についての考察を試みたい。現代を舞台にしたサイエンスフィクション *NLMG* と太古に設定されたファンタジー的作品 *BG* は一見接点が少なく、それぞれが異なる文学的ベクトルを示しているように見えるが、後者は前者の主題やメッセージを内包、継承し、さらにそれらを発展的に提示している点を、最新作の作品分析を中心に検証していく。*BG* は *NLMG* の10年後に出版されているが、イシグロがあるインタビュー<sup>2</sup>で発言したところによると、

---

<sup>1</sup> 本稿は日本英文学会中国四国支部第69回大会シンポジウム「Kazuo Ishiguro 再考——さらなる解釈の可能性を求めて」(2016年10月30日、愛媛大学)において口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。

<sup>2</sup> David Barr Kirtley, "Interview: Kazuo Ishiguro," *Lightspeed: Science Fiction and Fantasy* Aug. 2015, 26 May 2016 <<http://www.lightspeedmagazine.com/nonfiction/interview-kazuo-ishiguro/>>.

BG を最初に着想したのは2001年、すなわち NLMG 執筆の最中で、これは両作品の創作が時期的にオーバーラップしていることを示す。そして両者の間には、単に時期のみならず、主題や手法の面でも接点があると考えても不思議ではない。実際この点はイシグロ自身も認めるところで、後ほどの議論で引用等を交えつつ議論していく。

## I

BG と NLMG を結ぶ接点としてとりわけ着目したいのは、愛情の存在確認を巡る特異なプロセスである。愛情という主題自体は一見平凡で陳腐にすら思えるが、イシグロの作品群を顧みれば、初期の頃から提示の仕方を変えつつ変奏曲のように繰り返されてきた事実思いに至る。たとえば、*A Pale View of Hills* (1982) や *When We Were Orphans* (2000) では親子の関係、*An Artist of the Floating World* (1986) では親子関係に加えて芸術家の師弟関係、また *The Remains of the Day* では執事と主人の主従関係ならびに男女の異性関係、というように広い意味での愛情のあり方が様々に形を変えて問いかけていられた。しかし、21世紀に書かれた二作品 NLMG と BG においてひときわ目を引くのは、愛情の所在を問う確認行為、あるいは「愛情のテスト」(test of love)<sup>3</sup> がプロット上の重要な要素として組み込まれ、かつ、そのプロセスが一風変わった、かつ極めてストレートな形で訴えかけられるという共通点である。具体的に両作品を見てみよう。

NLMG においては、特殊な施設ヘイルシャムで育ったクローンが人間への臓器提供の猶予を求めるには、カップル同士の愛情が真実であることを証明できるかどうか重要な鍵だと考えられている。

What they said . . . was that if you were a boy and a girl, and you were in love with each other, really, properly in love, and if you could show it, then the people who run Hailsham, they sorted it out for you.<sup>4</sup>

このため、主人公キャシー (Kathy) と恋人トミー (Tommy) は、自分たちの愛情の事実を訴えるため、かつて所属したヘイルシャムの関係者のもとへ出かけていく。BG では、息子探しの旅に出かけた主人公のアクセル (Axl) とベアトリス (Beatrice) 老夫妻が、互いの愛情の絆をやはり第三者の前で問われている。夫妻が旅の途上で出会った船頭は、自分が船渡しする目的地の島へ夫婦ともども

<sup>3</sup> Kirtley.

<sup>4</sup> Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go* (London: Faber, 2005) 140.

赴くには、二人の最も大切な記憶を別々に話してもらい、それによって“an unusually strong bond of love between them”, “a bond of love unusually strong”<sup>5</sup> が証明される必要があると告げる。いずれも奇抜で風変りな愛情の立証方法であるが、これらのエピソードは両作品に共通してプロット上の核となる不可欠な要素をなしている。

さらなる共通点は、自らの愛情の存在を訴える主人公たちのこれらの主張が、いずれも満足のいかぬ結果に終わるという事実である。*NLMG* では猶予自体が実体のない噂に過ぎなかった事実が明かされ、キャシーとトミーは深い失望感に襲われる。*BG* では結末部においてアクセルとベアトリスが一つの船に同乗することを拒まれる。*BG* のこの点について具体的に考察してみよう。二人がそれぞれ船頭と話をし、自分たちの意に反して、ベアトリスがアクセルを残して先に船に乗ることになった場面での最後の対話は、“Farewell then, Axl.” “Farewell, my one true love.”(345) というものである。この何気ない簡潔なやりとりは、表面的に見れば、二人の行く末について必ずしも明示的ではなく、オープンエンディングの様相を呈しているかに思われる。しかし、これは実質的に二人の別離を示唆する対話だと解釈することができる。なぜなら、小説中には互いの存在を確認する夫妻のやりとりが、同じく対になった会話体で何度も繰り返され、それらが最後のやりとりと表裏一体の関係となっていると考えられるからである。

“Are you still there, Axl?” “Still here, princess.” (31, 34, 109, 110)

“Axl, are you still there?” “Of course I’m still here.” (246)

表向きの文脈では、これらは旅の途中で互いにはぐれないために繰り返される対話なのだが、この存在確認は愛情の存在確認ともオーバーラップするものである。イシグロは、こうした会話の反復には「お互い歩調が合っているようす、親密さ」<sup>6</sup> を表すという意図があると説明している。ところが、このように小説中5回も執拗に存在確認を行っていたベアトリスは、アクセルの過去の浮気をふと思い出した物語途中の時点で距離を置こうと言い出し、その後、アクセルは“five, six paces apart”(272) という距離をとって歩く二人の様子を思い浮かべることとなる。

この夫婦の微妙な距離の広がりとは並行する形で、小説の終盤では、人間の記憶

<sup>5</sup> Kazuo Ishiguro, *The Buried Giant* (London: Faber, 2015) 43, 334. 以下の引用はすべてこの版に拠り、本文中にページ数を記す。

<sup>6</sup> 「特集カズオ・イシグロ『忘れられた巨人』—失う記憶、取り戻す記憶」『新刊展望』8 (2015) : 10.

を忘却させる要因となっている霧を発生させていた怪物クエリグが退治され、人々の脳裏には様々な過去の記憶が蘇る。アクセルが苦痛を伴いつつ思い起こした夫妻間の記憶は、二人の旅の目的である息子に関するものである。アクセルは、息子の家出の原因が両親それぞれの不義密通と、それに端を発したいさかひにあったこと、さらには、その後息子は疫病で死亡したが、彼の墓に行こうという妻の願いを自分が強引に禁じてしまった事実を思い起こす。これらの記憶は当然ベアトリスも共有しているはずのものだが、後者の記憶については彼女が保持しているかどうか小説中には明示されていない。しかし、船頭はこれらの記憶の告白をアクセルから聞いた後に夫妻が同船することを拒んでおり、その延長線上に“Farewell then, Axl.” “Farewell, my one true love.” という最後のやりとりが登場することになるわけである。愛情の亀裂を生む過去の記憶の復活プロセスと、反復される夫婦の対話の破綻プロセスは巧みにオーバーラップし、その相互作用は非常に大きな効果を生んでいると言える。

さて、上記のようにイシグロはこの小説に記憶の問題を絡める形で物語世界を作り上げている。イシグロはどの小説においても記憶の主題を扱う作家だが、BGの斬新な点は、記憶そのものが消失する世界が構築されていることである。人間の曖昧で過ちを犯しがちな記憶の有様、あるいは記憶を恣意的に歪曲、改ざんしたり、抑圧、隠蔽したりする行為は、これまでのイシグロ小説によく見られる常套的パターンであった。もちろんBGにおいてもこの兆候は見受けられるが、この小説では大元の記憶自体が消失している、あるいは忘却が前提となっているという点で、それまでの小説とは大きく異なる。ある意味、記憶の主題を探究するイシグロの最も大胆な試み、究極的な設定とも言えるだろう。ちなみに、この記憶の消失という設定は、実は本作品が初めての登場ではなく、BGが着想された時点と同じ2001年、*The New Yorker* 誌上に掲載された“A Village after Dark”という短編作品の中で実験的に用いられている点も指摘しておきたい。

この記憶の不在という斬新な設定は、愛情の存在証明とどのように結びつくのだろうか。イシグロはこの小説をラブストーリーだと述べているが、<sup>7</sup> 普通のラブストーリーであれば、愛情と記憶は互いが互いを育むものとして容易に結びつく。しかし記憶の不在を前提とするBGにおいては、それは当てはまらない。物語の序盤に登場する黒いほろを着た謎の女は、ベアトリスに対して、“How will you and your husband prove your love for each other when you can't remember the past you've shared?” (48) と疑問を投げかける。また、彼女に影響を受けた

---

<sup>7</sup> Jane Gayduk, “The Long Haul of Love,” *Los Angeles Review of Books* 17 May 2015, 26 May 2016 <<https://lareviewofbooks.org/article/the-long-haul-of-love/>>.

ベアトリスは、アクセルに対して、“I’m wondering if without our memories, there’s nothing for it but for our love to fade and die.” (49) と訴えている。記憶の回復が不可能とされる環境で、それが実現できなければ愛情は確認できないというジレンマは、記憶の消失を前提とする本作品の独特な世界観によってのみ成立するものである。そして、既に述べたように、アクセルとベアトリスは物語終盤における記憶の復活と並行した形で愛情の絆の強さをテストされることにより、隠された過去の夫婦の亀裂を現出させてしまう。このようなパンドラの箱を開ける危険性に関しては、既に物語の中盤において、彼らのメンターのごとき役割で登場する修道院神父ジョナス (Father Jonus) によって、“Is it not better some things remain hidden from our minds?” (171), “Yet the mist covers all memories, the bad as well as the good.” (172) という警告がなされていた。しかし、防衛装置としての忘却作用を説くこの警告も空しく、記憶の復活が愛情の存否に影を落とすことになるという皮肉な結果を生じさせてしまうのである。

## II

BG でさらに特筆すべき点は、こうした愛情と記憶の乖離の問題が、以上のような個人のレベルのみならず、社会、国家、民族のレベルへと拡大され、両者がパラレルに提示されているという事実である。以前までの作品とは異なるこの新たな試みについて、イシグロは以下のように述べている。

I’ve written all these books about individuals struggling with their personal memories . . . and not knowing when to hide from their past and when to confront their past for some sort of resolution. But what I really wanted to do was to write about that kind of struggle at the societal level. Most countries, when you look at them, have got big things they’ve buried.<sup>8</sup>

最後の表現は小説のタイトルとオーバーラップするものである。過去のイシグロ作品においても、私的な個人に相対するものとしての公的な国家の歴史は扱われてはきた。しかしそこには、公の歴史そのものは動かさざる明確な事実であるという確固とした前提があった。*A Pale View of Hills*, *An Artist of the Floating World*, *The Remains of the Day*, *When We Were Orphans* においてクローズアップされた第二次世界大戦を巡る歴史的事象、あるいはSF的設定がなされた

<sup>8</sup> Gaby Wood, “Kazuo Ishiguro: ‘Most Countries Have Got Big Things They’ve Buried,’” *Telegraph* 27 Feb. 2015, 17 Jan. 2016 <<http://www.telegraph.co.uk/culture/books/11436950/Kazuo-Ishiguro-Most-countries-have-got-big-things-theyve-buried.html>>.

NLMG のクローン産業の盛衰ですら、その歴史的存在自体は覆せない自明なものであるという前提を持った世界観が構築されていた。しかし、BG では公の歴史や社会の「集団的記憶」(collective memory)<sup>9</sup> そのものが疑問視され、覆される。これも記憶の消失を前提とした世界観を持つ本作品だからこそ可能となったプロット設定だと言えるだろう。

そして、この公的な歴史が覆されるという設定は、決してフィクショナルで荒唐無稽なものではなく、現実の世界の実態を反映したものである。イシグロは、ユーゴスラビア解体後に生じたボスニアやコソボでの紛争という現実の社会現象に衝撃を受けたことが、この作品を執筆する上で大きな動機づけになったと述べている。

ボスニアで起きたのはまさにそのようなことでした。埋められた記憶が、意図をもって掘り起こされてしまったのです。おそらくどんな社会にとっても、何を記憶し、何を忘れ去ってしまうべきかを決定することはとても大きな問題です。そして扱うのがとても難しい問題です。<sup>10</sup>

『忘れられた巨人』は、「社会における記憶」を扱った作品です。人間はいかにして憎しみを作り上げるのかについて書きました。この社会では時として、過去をあえて掘り起こして、今では存在しないはずの憎しみを過去の記憶から新たに作ったり、世代から世代へと伝えていくことがあります。歴史をコントロールすることによって、憎しみが再創出されることがあるのか、という問題を描きました。<sup>11</sup>

この鋭敏な現実感覚こそが、ファンタジーというジャンルの枠組みをまとった本小説に、確固たる礎と迫真性を与えていると言える。あるいはむしろ、イシグロはこのあまりに悲劇的な現実性をオブラートに包むためにファンタジーという装置を用いたと言えるかもしれない。それまでの作品に見られる、過去の歴史は覆

---

<sup>9</sup> Alexandra Alter, "For Kazuo Ishiguro, 'The Buried Giant' Is a Departure," *New York Times* 19 Feb. 2015, 10 Jan. 2016 <<http://www.nytimes.com/2015/02/20/books/for-kazuo-ishiguro-the-buried-giant-is-a-departure.html?>>. Nathaniel Rich, "The Book of Sorrow and Forgetting: Kazuo Ishiguro, Master of Buried Secrets, on Losing the Past," *Atlantic* Mar. 2015, 17 Jan. 2016 <<http://www.theatlantic.com/magazine/archive/2015/03/the-book-of-sorrow-and-forgetting/384968/>>.

<sup>10</sup> 若林恵「埋められた感情：カズオ・イシグロ」『WIRED』19 (2015)：68.

<sup>11</sup> 「平成の原節子，世界的作家に会いに行く：綾瀬はるか×カズオ・イシグロ」『文藝春秋』2 (2016)：220.

せないという静的な世界観から、葬られた過去を掘り起こすことにより歴史は変えられうるという動的な世界観への転換が、BGにおけるイシグロの斬新な試みであると言えるだろう。

上記二つ目の引用で、イシグロは「憎しみ」という言葉を三回繰り返している。憎しみの反意語が愛情であることを踏まえれば、本論の冒頭から議論してきた愛情の問題は、私的な個人のみならず公的な社会のレベルにおいても重要な主題となる。BGにおいてアクセルとベアトリスの夫婦関係とパラレルをなすのは、ブリトン人とサクソン人の民族的関係である。アクセル夫妻と同様に、過去の埋められた記憶が掘り起こされた際、これまでの関係が維持されうるのかという問題提起がなされている。結論的に言えば、イシグロは本作品においてこれに否定的な姿勢を示している。イシグロが目撃した現実の世界がそうであったように、小説の世界でも社会や民族の憎しみは「再創出」されるのだ。記憶消失の媒体であった怪物クエリグを退治したのは、サクソン人の戦士ウイスタン(Wistan)である。そうすることにより、彼はかつてアーサー王存命時代にブリトン人がサクソン人を大量虐殺したという埋もれた歴史的事実を掘り起こす。同時にイシグロは、アクセルが元ブリトン人兵士で、その大虐殺を阻止できなかったという悔やむべき過去のエピソードを巧みに挿入している。目的を達したウイスタンは、アクセルに対し以下のように述べる。

The giant, once well buried, now stirs. When soon he rises, as surely he will, the friendly bonds between us will prove as knots young girls make with the stems of small flowers. (324)

「絆」という言葉は、船頭が言明していたように、アクセルとベアトリスの愛情関係の是非を問うキーワードだったことを想起させるが、それがここではブリトン人とサクソン人との関係に適用されている点に着目したい。そして後者においても愛情と記憶の関係はすれ違い、軋轢を引き起こす。物語の現時点におけるブリトン人とサクソン人の安定した状態は、記憶が封印されているがゆえの表層的かつ脆弱なもので、記憶が掘り起こされれば、愛情とは正反対の憎悪が表面化するの自明である。ここでさらに重要なのは、歴史は人間の意図によって創出されうるというものだという認識の提示である。ブリトン人はサクソン人大虐殺という不都合な史実を葬り去るという意図のもと、クエリグの吐く霧の忘却作用を利用し、また逆に、クエリグ退治によって葬られた史実を掘り起こしたのは、サクソン人の過去と未来を案じるウイスタンの強い意図によるものである。ここには、「歴史をコントロール」しうる人間の恣意性の問題や、何をもって正史とな

しうるのかという根源的な定義づけの問題が、テーマの一つとして重厚に提起されている。

### III

以上のような考察を踏まえれば、BG は、太古を舞台としたファンタジー小説という表向きイメージとは裏腹に、実は希望のない悲観的なディストピア小説であるという結論が導き出せるかもしれない。そして、NLMG にもよく貼られるそのレッテルは、ある程度正しいと言えるだろう。しかし、イシグロの執筆意図ははたしてそれに留まるのだろうか。最後にこの点について検討してみたいが、それには最初に議論したアクセル夫妻の別離の場面にいま一度立ち返る必要がある。この場面について、イシグロは以下のような意義深い解説をしている。

In my mind it's pretty clear: the voyage to the island is about death. However much you love each other, however much you wish it weren't so, there's no way to go together across that line. And I didn't want it to be brutal! But I thought that's what the couple in my novel realized when they finally got to that point, that there's no way around it and so [Axl] goes back and [Beatrice] makes that voyage by herself. That's what's happening at the end.<sup>12</sup>

島への船出が死に関わるという説明は唐突なように思えるが、続けてイシグロは、これが文字通りの死というよりもメタフォリカルな死であると付言している。だが確かに、老いたベアトリスが体の不調を再三訴える場面や、彼女が旅の途上の川面で小妖精に群がられ、アクセルがそれを追い払おうと孤軍奮闘する場面は、彼女の死期が遠くない事実を示唆していると考えられるだろう。また、彼女が行こうとしている島には死んだ息子が葬られているとされており、それを踏まえると、船頭は黄泉の国 (Hades) へ死にゆく者の魂を渡す三途の川 (Styx, Acheron) の渡し守 (Charon) であるという解釈が可能である。<sup>13</sup> 加えて、この島とはアーサー王が最期を迎えたとされる伝説のアヴァロン (Avalon) であるという捉え方もできよう。

<sup>12</sup> Gayduk.

<sup>13</sup> Leyla Sanai, "The Buried Giant by Kazuo Ishiguro, Book Review: Don't Fall for the Fantasy: This Novel Is Classic Ishiguro." *Independent* 28 Feb. 2015, 26 May 2016 <<http://www.independent.co.uk/arts-entertainment/books/reviews/the-buried-giant-by-kazuo-ishiguro-book-review-dont-fall-for-the-fantasy-this-novel-is-classic-10076373.html>>.



先の引用に関連して考えたいのが、*NLMG* と *BG* の共通点に関する以下のイシグロの言葉である。

That sense of what happens to love between people when the proximity of death is felt is something that both books have in common. And that is quite an emotional subject. It would be odd if it wasn't.<sup>14</sup>

二つの引用に共通するのは、愛情と死の問題が組み合わされている点である。我々は、ベアトリスの死を目前にして別れが不可避なものとなった二人の愛情の状態について、ここで改めて考察する必要がある。また、イシグロの言う「感情に訴える主題」とはどのようなものであろうか。イシグロは“emotional”という言葉を重視し、自己の作品を通して普遍的な感情を運ぶことの重要性を数々のインタビュー等で訴えているが、<sup>15</sup> 以下の言説は示唆に富んでいる。

... I recognize an emotion that people have: that love is so hard to find, and it's so hard to maintain, that when you do that even halfway successfully, you feel it's so special that surely people recognize the very special and unique nature of it. ... I think that idea that maybe love can trump death, or at least trump some of the worst aspects of death, is there in every kind of storytelling ...<sup>16</sup>

愛情は発見し維持するのが難しいが、たとえ不完全であってもそれをなしとげられれば特別なものとなり、死をも凌駕しようという考えは、アクセル夫妻の別離の解釈に一つの救いをもたらすものである。確かに、この場面が永劫の別れを意味することは間違いないだろう。また、二人の過去の暗い記憶が蘇った後、それに基づいて愛情の絆の強さが不十分であると考えた船頭の判断自体は覆されることはないだろう。しかし、二人の愛情やそれまでの夫婦生活そのものが、すべて否定の対象となる描かれ方がなされているわけではないことに着目すべきである。アクセルは過去の記憶が蘇った場合のベアトリスの気持ちを危惧し、あらかじめ彼女に対し、たとえ悪い記憶が蘇っても自分への今の想いは忘れないでほしいと請い、同意の約束をとりつける。

<sup>14</sup> Alex Clark, "Kazuo Ishiguro's Turn to Fantasy," *Guardian* 19 Feb. 2015, 25 May 2016 <<https://www.theguardian.com/books/2015/feb/19/kazuo-ishiguro-the-buried-giant-novel-interview>>.

<sup>15</sup> 若林 67-68はその一例。

<sup>16</sup> Kirtley.

Promise me this at least. Promise, princess, you'll not forget what you feel in your heart for me at this moment. For what good's a memory's returning from the mist if it's only to push away another? Will you promise me, princess? Promise to keep what you feel for me this moment always in your heart, no matter what you see once the mist's gone. (280)

また、アクセルは船頭に対して以下のように訴える。

For I suppose there's some would hear my words and think our love flawed and broken. But God will know the slow tread of an old couple's love for each other, and understand how black shadows make part of its whole. (341)

アクセルは、長年にわたってゆっくりと醸成されてきた愛情の価値が損なわれることはないこと、そしてそこに「暗い陰り」が生じたとしても、それも愛情に満ちた人生の一部として許容しうることを主張している。ここに認められるのは、掘り起こされた過去の過ちの歴史を受け入れ、また、それによって生じる別れや死の現実を受け入れながらも、それまで培われた愛情の記憶は失われることはなく、大切に保存しうるものだというイシグロの考え方である。ここにはイシグロが常に追究してきた記憶の持つポジティブな可能性に対する信念が見受けられる。この信念は、*NLMG*においても、絆で結ばれたかつての親友たちを次々に看取ったキャシーの“The memories I value most, I don't see them ever fading. I lost Ruth, then I lost Tommy, but I won't lose my memories of them.”<sup>17</sup> という想いの中に具現化されていたものであり、*BG*が前作品から継承した重要な要素の一つだと言えるだろう。そして、イシグロが伝えたいと考えていた「感情」の答えは、そこにこそ見出すことができると考えられる。

同様のことは公の歴史についても当てはまる。過去の歴史が復活した後に生じると予測されるのは、ブリトン人に対するサクソン人の憎しみや復讐心、そしてブリトン人にとって代わるサクソン人の新たな国の創造である。その結果ブリトン人に残された未来は、ウイスタン曰く、“You'll flee or perish.”(324) という、間接的に死を連想させる悲劇的道程である。先に見たように、両民族の絆の分断をもたらず役割を担う人物は、サクソン人への愛情を公言する戦士ウイスタンである。しかし同時に着目したいのは、彼の見せるアンビバレントな立ち位置であ

<sup>17</sup> Ishiguro, *Never Let Me Go* 262.

る。彼は子供時代にブリトン人の間で暮らし、そこで出会ったアクセルに敬意を抱いている。このため、ブリトン人への「憎しみ」と同時に「愛情」も捨てきれない。

Perhaps I've been too long among you Britons. Despised the cowardly among you, admired and loved the best of you, and all from a tender age. (322)

Yet I'm enfeebled by my years among you, and try as I will, a part of me turns from the flames of hatred. (324)

このようなジレンマを抱えるウィスタンは、ブリトン人への憎しみを継承してほしいという民族的願望を、彼を慕うサクソン人の若者エドウィン (Edwin) に託す。ウィスタンとエドウィンには、かつて母親をブリトン人に拿捕されたという共通点がある。この若者に戦士の資質を認めたウィスタンは、“When the hour's too late for rescue, it's still early enough for revenge.”(264) と述べ、すべてのブリトン人に対する憎しみを保持することを彼に約束させる。こうして民族的な復讐心を継承したエドウィンだが、この後継者の決意もまた決して一枚岩とは言えない事実は決して看過できない。クエリグが退治された後、彼はアクセル夫妻と対面し、内心でウィスタンとの約束を思い出す。その後ベアトリスは以下のような要求をするが、それに対するエドウィンの反応は注目に値する。

“Master Edwin! We both beg this of you. In the days to come, remember us. Remember us and this friendship when you were still a boy.”

As he heard this, something else came back to Edwin: a promise made to the warrior; a duty to hate all Britons. But surely Wistan had not meant to include this gentle couple. (328)

アクセル夫妻たちと出会った当初、ブリトン人である彼らに対するエドウィンの印象や反応は距離を置いたものだったが、この場面ではアクセルたちを気遣い、民族的嫌悪の対象から除外するという予想外の一面を見せる。重要なのは、この彼の心の揺らぎが、今までの記憶を保持してほしいというベアトリスの要求によって誘発されている点である。ベアトリスの言葉は、彼女自身が夫からかけられた“Promise, princess, you'll not forget what you feel in your heart for me at this moment.”という言葉と響き合っているのだ。そして、両民族同士の紛争

がほどなく再燃するのが必定となった状況の中で、エドウィンが見せる慈悲心はかすかな希望の芽となりうる可能性を示唆している。その礎となるのがそれまで築き上げられてきた私的な友好の絆や愛情であり、これは民族間の憎悪を超越した可能性を持つものだと言えるだろう。これは個人の私的記憶が公の歴史の記憶にリンクし、全体としてはディストピア的展開を見せる物語に、一条の救いの光をもたらすエピソードだと言える。イシグロは作品中で、厳しい社会的リアリズムの視点と寛容な情緒的アイディアリズムの視点との融合を提示しようと試みているのだと解釈できる。そして、この姿勢は *NLMG* をはじめ彼の諸作品に少なからず通底する重要なファクターでもあるのだ。

### 結

以上、イシグロの最新作 *BG* に関し、愛情の特異な提示手法を皮切りに、消失する記憶という新たに試みられた主題の意味、それらが個人のみならず民族や国家といった従来の作品以上に大きく動的なスケールで提示されている事実、そして公私両方に通底する生死や存亡の可能性に対する作者の姿勢について考察を行ってきた。その中で、イシグロが長年にわたる構想期間を経て生み出したこの小説が、過去の作品群、とりわけイシグロ自身が共通点の存在を認める *NLMG* と深い結びつきを持っている点、加えて、この作品には単なる関連性や継承性のみならず、記憶の扱い方や歴史認識のあり方等を巡って新たな発展的要素が随所に盛り込まれている点を確認した。本作品は出版直後よりファンタジー的要素を巡る議論が書評等でさかんなにされてきたが、イシグロ本人もいろいろな場所で発言しているように、それ自体は第一義的な問題とは言えない。むしろ、そのジャンルの枠組みをまとった本作品が、本質的にはいかなる思想的、手法的側面を追究しているのか、結果としてイシグロ文学の中でどのように位置づけられるのかを検証することにこそ意義があるだろう。それはイシグロ作品の現在を知り、その文学的動向や将来の可能性について吟味することにも繋がる。本論考ではその視座のもと、*BG* について考察してきた。イシグロは過去の作品に見られる主題や手法を踏襲しつつも、創作活動におけるさらなる進展を模索し続けている作家なのである。

山口大学

## *The Buried Giant* as Inheritance and Development of Kazuo Ishiguro's Literary World

---

Hiroshi Ikezono

---

On publication Kazuo Ishiguro's latest work *The Buried Giant* (2015) evoked both public acclaim and criticism due to his unprecedented representation of fantastic elements. Recognizing his apparently drastic turn to fantasy, however, this paper intends to investigate how the new novel inherits and develops the literary traits which permeate the author's previous works, focusing on its predecessor *Never Let Me Go* (2005) in particular.

One of the most noteworthy plot features shared by *BG* and *NLMG* is the bizarre but significant "test of love" and the protagonists' failure in passing it. In *NLMG* the clone couple Kathy and Tommy try in vain to demonstrate their mutual love in order to obtain a deferral of organ donation. In the closing scene of *BG* the old couple Axl and Beatrice are requested by a boatman to show their strong bond of love in order to sail to the enigmatic island together. The long-forgotten memory of their past discords, however, leads to their failure to share their voyage and consequently to their separation.

Memory is an indispensable theme Ishiguro pursues in every work, but one highly innovative facet of development in *BG* is the unprecedented construction of the narrative world based upon the assumption of collective amnesia that spreads in society. This ultimately unique setting effectively contributes to individuals' suffering from contradiction between love and memory; their natural interdependence is hampered by the hopeless impossibility of remembering love. In parallel with the death of Querig, the she-dragon whose breath has been erasing human memories, the unexpected disclosure of memories that should have remained hidden overshadows the old couple's love, accelerating their final parting.

In *BG* this private problem of disparity between love and memory is extended further to a more public level of society, nation, or tribe. Irrevocable disasters that actually occurred in tribal conflicts such as that of Bosnia or Kosovo, Ishiguro says, helped him develop the novel's incipient concept. In *BG* he deals with how human beings can intentionally uncover hidden pasts and incite tribal hatred, not love, consequently reversing and controlling the so-

called public history. In *BG*, although the past memory or history of Britons' genocide of Saxons has long been erased, Wistan, a Saxon warrior with conscious hatred of Britons, succeeds in digging up the buried history and turning the table in favour of his tribe, with the possible result of the other tribe's downfall.

Thus considered, *BG* can be labelled as a dystopian novel under cover of its fantastic features. Ishiguro's aim is rather different, however, as demonstrated in his argument on the relation of love and death, which he says *NLMG* and *BG* have in common. In order to confirm this, Axl and Beatrice's parting scene requires further examination. Ishiguro explains the voyage to the island is about metaphorical death, then insists love, although hard to find and maintain, can trump death if carried out even halfway successfully. This idea offers a ray of hope to the old couple's fatal parting. In spite of its inevitability, Ishiguro does not negate or bury the memory of their long-fostered love; Axl manages to persuade Beatrice into agreeing to remember it still in the face of black shadows marring it. Here is Ishiguro's positive belief in memory's intrinsic value, which he has explored throughout his literary career.

The same applies to the public history. After the revival of the buried giant, or the hidden societal collective memory, all that is left for Britons is tribal ruin or death. However, the ambivalent position of Wistan, who lived among Britons in his childhood, has him treasure love as well as hatred for them. He then entrusts Edwin, a promising Saxon boy, with the task of taking over their tribe's vengeance. But Edwin, who gradually sympathizes with Axl and Beatrice, also emotionally vacillates, excluding them from his scheme. The two Saxons' inner scruples are a saving grace in the devastating future prospects, particularly since they are triggered by the memory of love and bonds. Ishiguro attempts to fuse severe social realism with generous emotional idealism. *BG* reflects both Ishiguro's established literary tastes and the ever-developing targets of his creative attention.

*Yamaguchi University*